

初夏の午前十一時に、私は大型のショッピングセンターにいた。朝はそうでもなかったが、この頃には気温が上がっていた。一階のATMで金をおろしてから、チラシに載っていたタチウオの刺身を買った。特売もので安かった。それから、駐車場がある四階に戻るために、三台あるうちの一台のエレベーターに乗った。私がエレベーターに入ると、すぐに二組の子連れが乗り込んできた。エレベーターはたちまちのうちに混んでしまった。カーポートが二台に子供が三人。その母親が二人。なにか喋っていた。エレベーターガールなどいなかった。

アイスクャンディーを舐めていた子供を見ないようにしていたが、それでも怖くなって汗が噴き出してきた。吐きそうだった。私は必死の思いで二階のボタンを押し、エレベーターを脱出した。駐車場は四階だったので、二階でしばらく時間をつぶしてから、誰もいない階段を使って、駐車場に出た。

駐車場では、別の子供がおもちやのガンを使って、戦争ごっこをしていた。バキューンとか、ガガガガとか言いながら、ガンを撃ったり、走り回ったりしていた。しまいには私の車に寄りかかってガンを構える奴までいた。車に当たって怪我でもされたら、とんでもないことになる。私は別の車の陰に隠れて、子供たちがどこかへ行くのを待った。やっとの思いで駐車場を出た。

それにしても、どうしたことだろう。子供に遇わないように、平日の午前中にやってきたのに大勢いるではないか。今日は休校日なのだろうか。

一旦カーポートに帰って刺身を冷蔵庫に入れてから、食事に出かけた。子供に遇いたくなくなったので、「うるさい子供はお断り」という張り紙がある蕎麦屋に行った。蕎麦屋は山の麓にあった。庭には鳥の餌場があり、ヤマガラやシジュウカラが餌をついばんでいた。

「今日もたくさん来ていますね」私は店主に声をかけた。

「ほんとかわいいね。うるさい子供とは大違いだ」店主も子供が嫌いだった。

「いい子もたまにはいるけれど、たいていはうるさいだけです。小鳥がかわいいそうです」

よ」と私は言った。蕎麦はおいしくて、私はデパートの忌まわしい記憶を薄めることができた。

その後、町に戻ってからコーヒーを飲みたくなったので、喫茶店に入った。かなり混んでいたが、子供はいなかった。そもそも、子供は喫茶店に入らない。お金を払い、アイスカフェラテを注文した。

受け渡しのカウンターで待っていると、先客が数人並んでいた。五分も待っていると、店員が「アイスカフェラテのお客様！」と私を見て声をかけたので、思わず「はい」と答えてしまった。「ただいま、おつくりしています」と言われてイラッとした。それから五分経った。注文してから、ちよつと外に出ていた客がいたらしく、混みようは変わらなかった。そしてまた「アイスカフェラテのお客様！」と声をかけられたが、黙っていた。店員は「ただいま、おつくりしています」と繰り返した。

それから五分。店員は今度はにっこりと笑いながら私を見た。

「アイスカフェラテのお客様！」

「……………」

「お持ちしますので、お席でお待ちください」

私は切れそうになったが、我慢して窓側の席に座った。通りに面していて、通行人が間近に見える。私はノートを取り出して、行きかう若い女性に寸評を書き始めた。この女は美人だが裏がありそうだとか、器量は悪いが何でも耐えられそうだとか、一見平凡に見えるが、すごいことを考えていそうだとか。知らない女性に直接話しかける勇気はなかった。この妄想だけで満足した。その後、コーヒーが来たけれども、飲む気が失せており、そのまま捨てて店を出た。

帰り際に、公園を散歩した。広々として気持ちがいいところだ。ところが、あいにくのことに、グラウンドで小学生たちがサッカーをしていた。うるさいから鳥が寄りつかないではないか、と思った。そこへ下手糞が蹴り上げたボールが足元にころがってきた。

「すみません、取ってください」という声が聴こえた。冗談ではない。もし、このボールにつまずいて倒れて骨を折っても、最近の判例では悪いのは自分であり、何の保証もされないのだ。ボールを拾うときに、ぎっくり腰になる恐れもあった。私はボールをそのままにして通り過ぎた。

午後から大学に行った。今日は大教室で社会学の講義があった。二百人くらいが聴きに来ていた。教授は椅子に座ったまま、ノートを読んでいた。マイクを使っても、ほとんど

聴き取れない声だった。ほとんどの学生はスマホでメールやラインをやり取りしたり、ゲームをしたりしていた。それでもこれだけ人が集まるのは、出席点をもらうためだ。講義の最後の三十分は、与えられた課題への答を紙に書いて提出するのだ。それが出席点として評価される。

今日の課題は、「両親について社会的にどう思うか？」というものだった。私は「家族を大事にし子供を育てることは、社会的に重要であり、子供は次の社会の活力になる。そういう努力を惜しまなかった両親に感謝している」と嘘を書いた。どうせ読まないだろう、喋る時間を減らしたいだけだろうと思ったが、嘘を書くのは何でもないことだった。

グーグル検索で、この教授について調べてみた。千件くらいしか情報がなく、何かの本の分担執筆が二、三と、学会の支部会の活動が出ているくらいだった。この大学では、ろくな教授がいなかった。

教室を出たところで、道彦に会った。道彦は高校からの友人であり、要領はよいが少々軽薄な男だった。

「よう、健史、最近どうだい。セックスしているか」

「……おいしい蕎麦を食べたところだ」

「この大学にはいい女がいらないなあ」

「うるさい子供にも遇った」

「こんど合コンしようぜ」

「静かな女がいい」

私と道彦はいつもそんな会話を交わしていた。

夕方から家庭教師をした。教えるのは由紀という名前の高校三年生だった。髪の毛を無造作に後ろで束ねていることが多かった。着ているものも、地味な色のパンツとTシャツあるいはトレーナーであり、気が乗らないとほとんど喋らない娘だった。

勉強ができたので、私が教えなくても大学に入れると思った。ただ、ときどき寝てしまふ。私が説明しているときに、気がつく寝ているのだ。正面を向いて座ったまま眼を閉じて寝ることもあれば、机の上に顎をつけて寝ることもあった。そういうときに、私は彼女の睡眠を妨げないように、「この問題を解いてみなさい」と言った。親が聞いているかもしれないから、何も言わないわけにはいかなかった。

私のこうした行動を彼女は気に入ってくれた。だから、由紀は私がいなくなるときに勉強し、

よい成績をとってくれたので、親も喜んでくれた。それに、彼女が寝ることもあれば、私が寝ることもあった。私が寝ても彼女は文句を言わなかった。こういう女はいいな、と私は思っていた。

その日も由紀は寝てしまったので、私は三回「この問題を解いてみなさい」と「よくできている」を繰り返し、最後に「これなら大学受験は大丈夫だ」と少し大きな声で言っただけで帰ろうとした。

そのとき由紀はむっくりと起きて私に訊いた。

「先生、最近何か楽しいことあった？」

「嫌な子供に出くわして気分が悪くなったよ。近頃は親がしつけをしないから、町中で子供が暴れている」

「子供たちは皆かわいく見えるけれども、先生は違うのね」

「おとなしく見える子供でも、大人がいないところで他の子供をいじめていることがある。騙されてはいけない」

「いじめられている子は可哀想ね。自分を傷つけたり、卑屈な性格になったりしなければいいのだけれど……」

「人間は進化の過程で常に外敵と戦ってきたんだ。捕食者や他の人間との戦いの中で、人間には攻撃的で他人をいじめて殺してしまう遺伝子が蓄積されてきた。その攻撃性をどう抑制するかが人類最大の問題だと、動物行動学者のローレンツ博士は書いている。だから、純真で無垢な子供が大人になって突然汚い心を持ち、悪事を働くのではなく、子供るときから悪魔が潜んでいると考えるべきなんだ」

「そんなことを考えていたら、将来結婚して子供をつくることはできないわよ」

「余計なお世話だ。君と結婚するわけではないから放っておいてくれ」

「それにしても、むずかしい漢字とか歴史上の出来事なんか、どうして憶えなくてはいけないの？」

「そんなことはインターネットで調べればわかることだから、憶える必要はないな。おそらく、無駄なことでも憶える忍耐力があるかどうかを、高校生のうちから試しているのだから。耐えられない奴は落ちこぼれとして分別されるのだ」

「テレビのクイズ番組でも、馬鹿な芸能人に小学生の問題とかを答えさせているじゃない。あれはどういう意味があるのかな」

「やさしい問題なら、視聴者は自分にはわかるので、それがわからない人を見ると嬉しく

なるのだろう。芸能人は、わからないふりをしているだけかもしれないけどね。リアルに見えるのはスポーツ選手だ。とんでもない馬鹿が出てくるけど、スポーツばかりしていたから仕方がないと思ってしまふからね。いずれにしても、それを見て視聴者はよい気分になれるんだよ。他の人が劣っていることを確認し心の中で喜ぶのは、人間の本能かもしれないね。いじめの萌芽だ」

「なるほど」と由紀はにっこりした。「うちの馬鹿な弟が喜んでいたわ」
その後、彼女はまた寝込んでしまったので、私はそのまま帰宅した。

アパートに帰ってテレビを見ていたら、地震が起きた。少し強めかなと思ったが、私の住む県は震源地から離れており、震度は3にすぎなかった。テロップで「念のため津波に警戒してください」と流れたが、私の県には海がないので、津波が押し寄せるはずはない。このテロップは地域対応になっておらず、海のある県に向けて発信されているのだな、と思った。しかし、逃げるべきか、家に留まるべきかは地域によって違うのではないか。「〇〇県の方は」というように、きめ細かな対応はできないものだろうか。それは、大雨や竜巻情報では、できているではないか。

そう言えば、この前の東北大震災のときには、避難せずに亡くなった人が大勢いた。初めの震度速報や津波予報が過小評価だったからだ。わからないのなら「とんでもない津波」とでもしておけばよかったのだ。偉い原発学者は、核燃料はほとんど燃えて減っているから、大した被害は出ないみたいなのを言っていた。評論家の中には、少しくらい放射能を浴びた方が元気になると主張した者がいた。今から思えばすべて間違いだった。爆発しないと見直さない原発政策というのもひどかったな、と私はつぶやいた。

次の日は、聴くべき講義がなかったので、図書館に行った。図書館は大学で唯一、心が休まる場所だった。そして、今日はゴールドキングの『蠅の王』を読んだ。飛行機が墜落し、生き残って無人島に取り残された少年たちが、やがて派閥をつくり対立して殺し合う話だ。似たようなことは毎日学校で起きている。小学生の自殺者は毎年二百人近くおり、いじめ自体は七万件もある。しかも、この数字は氷山の一角。いじめられた子が自殺したり、学校を辞めたりしないと、表面に現れにくいのだ。ほんとうに子供は恐ろしい。

昼食は近くの立ち食い店で、かき揚げてんぷら蕎麦を食べた。デフレのおかげで二五〇円で食べられた。たまねぎだけのかき揚げだったが、それで十分だった。大学の生協食堂は騒々しいので行かないことにしていた。ときどき馬鹿が話しかけてくるので、おいしい

食事もまずくなるのが嫌だった。

腹ごなしに公園を散歩した。今日もサッカーをやっていた。しかも、試合をしていた。ぼんやりと見ていると、その中に翔太がいた。翔太は由紀の弟で小学六年生だった。私はスポーツ観戦が好きだった。テレビで音を消して見ることも多く、競技場へは行かない。子供のサッカーなど見ないが、翔太がいたので少し観戦することにした。ところが、まるで下手である。ボールにばかり群がって、戦術がなかった。

「どうしたのかなあー、ダンゴムシばかりだよ」と叫んでしまった。

「ほらほら、そこのお兄ちゃん、ちゃんと相手をマークしましょうよ」何だか熱くなってきた。言われた選手はびっくりして、こつちを振り向いた。そのあと私は、大声で野次りつづけた。翔太がやってきて、もう止めてくれ、と言ったが、私は無視をした。翔太のチームは大敗したが、私は気分がすっきりした。たまには、こうして大声を出すのもよいものだ、と思った。

「あの一、あなたはサッカーの選手ですか」

もう帰ろうとしていたら、突然声をかけられた。振り返ると、若い女が立っていた。

「いや、サッカーを見るのが好きだけです。きついことばかり言って、不愉快に思われたいら謝ります。うるさかったかもしれません」

「そうではないのです。あなたの言われることがとても適切だったので、選手かコーチをされているのかと思ひました。私はこのチームのマネージャーをしている樋口理恵といいます。今までも何人かにコーチをお願いしたのですが、うまくいかなくて困っております。今日も何もしないままに負けてしまいました。この前のコーチは、いじめと言われるのを恐れて厳しい指導ができなかったのです。それで、あなたのような方なら、チームを強くしていただけるとは思いませんか、と思ったしだいです」

「私に監督をしろということですか？ 私は学生で勉強が忙しいので、監督は無理ですよ」
「いや、そうではないのです。ただ、練習や試合をときどき見に来て、厳しい指摘をお願いしたいのです。ぜひ、お願いします」

理恵はこの地方では珍しく、目がぱっちりした美しい女だった。長い髪がきれいだった。それに、サッカーを教えるのも気晴らしになるかもしれない、と思った、私はこの仕事を引き受けることにした。

その日の夕食は中華料理を食べようと思った。客が多くてうるさいけれども、安くてお

いしい店に行った。ところがこの日は、店に入って二分も経つのに、水を持ってこなかった。いくら安くておいしくても、サービスの悪い店は御免だ。私はあきれて店を出た。次も同じ目にあうと血管が切れそうになるので、回転寿司屋に入った。私はとにかく生の魚が大好きだった。それに、ここならば、入ったらすぐに食べることができ、最後に「おあいそ」と言っただけで店員がやってきて、皿の数を調べてくれる。いっただったか、カウンターの寿司屋で「サバ」と頼んだら、尾の近くの油のない、まずそうなのをにぎられたことがあった。それに対して回転寿司では、皿を選ぶことができる。いいネタがなければ、何も食わないで店を出ることもできる。鮮度の悪い皿がいつまでも回っていたり、客が少ないと皿を流さなかったりするのが嫌だけれども、今日はまずまずの出来だった。

翌日は大学で生物学の実習があった。この日は動物の個体数を推定するという内容で、グラウンド周りの原っぱで、バッタを捕まえてはその背中にマジックで番号を書き、再び放す作業を繰り返した。次回に捕まえるバッタのうち、何匹に標識がついているかを調べれば、全部で何匹のバッタがいるのかがわかる、というものだった。教官はベンチで寝ていた。同級生たちはワイワイ言っただけでバッタを捕っていたが、私はあほらしいので草むらの中で大の字になって、空を見ていた。そして子供の頃を思い出した。

小学校の回りには小川が流れていた。体育の授業では、ソフトボールの試合をしていた。大勢が交代で出場していたので、一人くらいいなくなってもわからなかった。それに、私は仲間はずれにされることが多かったので、打席に立たせてもらえそうになかった。

私は一人で水路へ行き、魚捕りをした。何気なく拾った缶からナマズが出てきたときには、ほんとうに驚いた。あれほど驚いたことは、その後ないな、となつかしく思った。あの頃から、私は友達と遊ぶよりも、一人で何かをすることが好きだった。

実習の時間が終わる頃、教官はベンチから起き上がって、「たくさん捕れたか」とだけ言って実習は終わった。

何か物足りない感じがしたので、映画を見に行った。最近の洋画はうるさいものが多いうえにつまらないので見なかった。その点で、この映画館は昔の映画ばかり上映するので、好きだった。上映する映画が変わると、それをインターネットで調べて、静かな映画だと見に行った。この日の映画は、アメリカのストレイト・ストーリーという映画で、じいさんが一人で旅をする物語だ。味のあるよい映画だった。

人気のある映画だと、観客でいっぱいになる。その中には、前の座席をボコボコ蹴る奴

がいる。子供でもいようなものなら、途中でつまらなくなって騒ぐことがある。混んでいると席を替えるわけにもいかず、いたたまれなくなって退席するしかなくなるが、チケット代は無駄になる。そういった嫌な記憶がちらついていたが、今回客は少なく、最後まで安心して見る事ができた。

夕食はコンビニで買うことにした。近頃のコンビニ弁当はご飯物にしても麺類にしてもとてもおいしいので、楽しみだった。今日はカレー丼を選び、レジへ持っていくた。

千円札を差し出すと、若いお姉さんはおつりを取り出しているが、いっこうに「暖めましょうか」と言わない。どんなコンビニでも、「暖めましょうか」は決まり文句である。仕方なく、私の方から「暖めてください」とお願いした。お姉さんは「あつ」と言つて、カレー丼を電子レンジに入れた。それから私の方を振り返ったので、「オンにしないと」と私は注意した。お姉さんはむっとしたような表情をした後、電子レンジをオンにした。二分損をしたと思つたが我慢した。

カレー丼を受け取るときに、「あのー、スプーンは入れて頂けましたか」と確認した。お姉さんは「はい」と自信に満ちた返事をしたので、私は安心した。しかし、アパートに帰つて開けて見たら、スプーンは見当たらずフォークが入っていた。

食事の後は、インターネットで囲碁を打った。ネット対局では相手は自動的に決められ、段位も成績に応じて決められるから、極端に弱かったり、逆に強かったりする相手と打たなくてすんだ。トラブルがないこともなかった。たとえば、終わったときにでたらめに死石を指定して勝とうとしたり、何十目も負けているのに出鱈目に打つてやめなかったりする奴らがいた。こういう場合には、事務局に申請すれば、対局記録が残っているので、正しい結果を判断し、さらに相手にペナルティを与えてくれた。たまに、「それはおもしろい手ですね」とか「私の勝ちだ」とか勝手なことをチャットで入れてくる奴もいたが、すべて無視をした。私の頭は細かいことも憶えてしまうので、うるさいことには敏感だった。憶えすぎて疲れたときには、囲碁を打ってリフレッシュすることにしていた。

その次の日、私は由紀の家庭教師をした。部屋に入るところで、由紀のお母さんに「翔太のサッカーの指導もしていただくそうで、ありがとうございます」と感謝されたが、まだ何もしていないので感謝されることはない、と言つた。

由紀は今日は元気で寝なかった。その代わりに、いろいろなことを訊いてきた。

「子供嫌いなのに、どうしてサッカーを教えることになったの？」

「小学校高学年だと、まだ耐えられる。怒鳴りつけることができるからね。だけど、もっと小さいのはだめだ。ほんとうに怖い」

「ところでさあ、うちの校長って馬鹿なのよ。私が馬鹿だとわかるくらい、相当の馬鹿。朝礼の挨拶なんて、日本語になっていないし、挨拶しましょうとか目上の人を大事にしよとか、道徳のことしか言わない。人を蹴落としてはいけないとか、皆で仲良く一生を過ごしましょうとか、現実と離れすぎているわ。しかも、そう言いながら、学校内のいじめには目をつぶっている。どうして、日本の組織のトップに立つ人はばつとしないのかな？」

「それはよい質問だ。誰もが感じていることだが、それを口にすると、上司批判と受け取られて立場が悪くなるので、誰も言わないのだ。近頃は、少し愚痴を言うだけで反抗的だと言われてしまうことがある。一方で、いじめやパワハラは横行している。そういうものに対抗するためには、弱くても強者に対して言うべきことは言わないといけない。それは弱者に残された権利なんだ。それから、トップに立つための社会のメカニズムと優秀になるためのメカニズムはちがうんだ。たとえば、首相になるためには、まず選挙で勝たなければならぬ。父親が政治家でその跡を継いだり、お金をばらまいて票を集めたりすれば、選挙に勝つ確率は上がるだろう。議員になってから首相になるには運も必要だ。しかし、お金があつてほかの議員の面倒を見れば、派閥をつくることができる。もちろん、あいそをよくして人に気に入られることも重要だ。こういうことは、優秀さとは関係ない。社長や校長も似たようなものさ。ただ、校長なんて教育委員会の言うことをよく聞いて、問題を起こさなければ、誰でもなれるだろう」

「私もそう思う」

「それまで、注目されていなかった政治家や社長が、大臣になったり問題を起こしたりして会見で発言すると、とたんにお馬鹿な失言で嗤われることがあるだろう。ああいうのも、それまでコネや金でのし上がった輩が馬脚を現したと考えれば、わかりやすい。日本の年功序列というのは、阿呆でも年を取ればトップに立てるということだ」

「馬鹿だったら魚は売れないから、魚屋にはなれないわよ」

「ただね。トップが無能だと言っても、実は二番目や三番目よりましかもしれないし、有能だったけれども管理職にいるうちに馬鹿になったのかもしれない。ブラジルのサッカー選手が言っていたのだけれども、彼らはシュートを打つときに、ただゴールをめざすのではなく、そのゴールの先にもう一つ真のゴールがあると想定してシュートを打つらしい。このシュートを打てば終わると思うと、人の脳は働きを停止してしまうのだった。だから、

まだまだ先があると考えると、ぎりぎりまで頭が働いてゴールが決まるんだ。囲碁でも、優勢で楽勝だと思うと、次の手から乱れて、最後にはボロボロに負けてしまうことがある。最後まで気を抜いてはいけないんだよ。そう考えると、人はトップに立つと、権力を握るとともにその先がないから、馬鹿になるのかもしれない。それからね、トップの人達はすぐ賢いとも言えるのだよ。出世するただけに知恵を働かせるのだから、それはただの馬鹿とはちがうかもしれない」

「なるほどね。でも、そんなのばかりでは、おもしろくないわね」

「そういう世界とは別に、競争のきびしい会社やスポーツの世界では、何と言っても実力がものをいうのではないかな。もたもたしていたら、ライバルに勝てないからね」

「先生は何になりたいの。学者？」

「それを毎日考えているんだ。うちの教授たちを目にすると、学者の世界も怪しいものだという気がしている。それでも、論文や本を出せば、誰かにみとめてもらえるかもしれない」

「小説家になったらどう。先生は資質があると思うわ。だって、普通の人より屈折しているもん。人の欠点を見つけては天才的よ」

「小説を読むのは好きだけど、書く能力はどうかなあ。すぐに怒ってしまったり、けちを付けたがるから、書いても誰も読まがらないのではないかな。それに、小説家になりたい人は大勢いるから、競争も厳しいだろう。同じことは音楽や美術についてもあてはまるけど。どの世界でも成功するのは大変だ」

「私はアイドルになろうかな」

「芸能界にコネでもあれば、なれるかもね。でも、もう高校生だろう。ちょっと遅すぎやしないか。少なくとも、さくら学院や私立恵比寿中学には年齢が高すぎて入れないな」

「恵比寿中学は何年生でもいいのよ。中学五年生とか七年生でも在籍できるんだって。それに、近頃のアイドルグループはそんなにかわいくないし、歌も下手だわ」

「アイドルってそういうものだろう。歌はともかく、ダンスは揃っているように見えるけどな」

「私、疲れるから踊るのは嫌い。だからアイドルは諦める」

「君は一つだけ、すばらしい能力を持っている。いつも寝てばかりで勉強量が少ないのに、集中するとよい成績をとることができる。これを生かすべきだ」

「ふーん、それは何かな。今は思いつかないから、じっくり考えてみる」

それから二日して、私は初めてサッカーチームの練習に立ち会った。理恵が私を紹介し、それから選手の一人一人が自己紹介したが、とても憶えられるものではなかった。翔太は知っていたが、えこひいきと思われるのは嫌だったので、わざと無視をした。理恵が私に今後のチームの方針を話してほしい、と言うので、この数日考えていたことを喋った。

「先日、君たちの試合を見て、君たちが頭を使っていないことに驚いた。サッカーにかぎらず、すべてのスポーツは頭を使ってするものだ。相手がいるのだから、そいつらとの駆け引きに勝たなければならない。そして勝つためには、試合の展開の一步先を読むことが必要だ。ボールにばかり群がらないで、空いているスペースを利用するんだ。それから大きな声を出すな。声を出す余裕があるのなら、敵や味方を観察しろ。味方とはアイコンタクトで会話しろ。あともう一つ、絶対にファウルをするな。抜かれても、それは自分が下手だからと自覚して、その屈辱を忘れるな。抜かれるたびに相手の服を引っ張って止めるのはみっともない。わかったか」

選手たちは「はい」とあまりに大きな声を出したので、私はめまいをしそうになった。「すばらしい。感激したわ」と理恵がほめてくれた。私は、子供たちにドリブルをして相手を抜く練習を課して、その間に理恵と公園を散歩した。

このチームはかつてはベテランのコーチが指導していたらしい。その頃には、地区で優勝したこともあった。ところが、そのコーチが問題を起こして辞めると、次のコーチは何もしない気弱な人で、チームはみるみるうちに弱くなっていった。有力選手は名のあるコーチのいるチームへ移り、メンバーが少なくなることで、会費が集まらなくなり、練習場の使用料やボールの購入代を支払うと赤字になった。気弱なコーチは辞め、チームのアシスタントをしていた理恵が臨時にコーチを務めていたが、若い女ということで言うことを聞かない者もいた。そこに私が現れたというわけだった。

私は思い切り優しい顔をして、理恵の話聞いてあげた。彼女の言うことをすべて肯定し、いつでも頼りにして欲しいと言った。めったに言わないことだった。その結果、理恵は私を信頼してくれ、私たちは付き合うことになった。

チームのところに戻ると、グラウンドを十週走らせ、次回までにディフェンスを抜く方法を各自、五通りずつ考えてこい、と宿題を出した。

その二日後、私は図書館の外庭に設置されていたベンチで、本を読んでいた。今西錦司の『生物社会の論理』。今西の著作の中で最高傑作と言われている。高校生のときに読んだ

のだが、よくわからなかったので読み返していた。〇〇の論理というと、都市の論理とか、殺される側の論理とか、なんか格好いいな、と思った。〇〇の理論というと、いかがわしいが、論理はいい、などと考えていた。でも、ダーウィンみたいに『種の起源』というのもしゃれているな。何より簡潔なのがよい。

ふと気がつくくと、横から立山が私の本を見つめていた。教養部で立山は同じクラスの男だったが、それほど親しいわけではなかった。二、三回言葉を交わしたことがあるくらいだ。

「この本は何の講義で使っているの？」

「……何のつて、どれとも関係ない。ただ読んでいるだけだ」

「講義に使わない本も読むの？」

「当たり前だ。教養部なんだから」

「読む本はどうやって決めるの」

「本屋や図書館で本の山を見てみると、読んでくれて本が言ってくるんだよ」

「そうなんだ。僕も試してみるよ」と言って立山は去っていった。

私は自分の高校時代を思い出した。大学進学という点で二流高校だった。授業を受けているだけでは入試に失敗することは明らかだった。そのために、授業で習うことは一ヶ月前には理解できるように予習し、授業中には難解な問題集を解いていた。たまに、よくわからないことを教師が言えば、それをメモして憶えた。それ以外のわかっていることは、いちいちノートに取らなかった。教師は私が勝手に勉強していることに気づいては、私を指して問題を出してきたが、私はそのすべてに完璧に答えた。そうこうするうちに、私は学校で成績が一番になった。それでも私は受験に失敗した。有名私立高校の生徒は、授業を聴いているだけで、よい大学に合格するのだろうか、と思った。そういう高校の卒業生がさつきのような授業崇拜・神経衰弱馬鹿になるのかもしれない。もともと、立山も受験に失敗したからこの大学に来たのだろうか……。

金曜日だったので、家庭教師に行った。由紀は今日も元気で、私を待ち構えていたように質問した。

「学校の勉強はもういいわ。大学くらい入れるから。それより、もっと社会のことを勉強したいの。先生がこれまでで一番だと思う本を教えてください」

「一番って、どのジャンルでの話だい？ 小説？ 哲学？ それとも生物学？」

「何でもいいのよ。とにかくこれっていう本を読んでみたい」

私はうーんと言って考えこんだ。むずかしい質問だった。小説はしょせん、つくり物だ。一瞬、私は『蠅の王』や『百年の孤独』にしようかと思ったが、ここまで期待されると言うのをひるんだ。宮沢賢治や村上春樹だと、知っていると言われてしまうかもしれない。結局、私は吉本隆明の『共同幻想論』を薦めることにした。

「今度持つてくるから、むずかしいかもしれないけど読んでごらん」

「共同幻想って何のこと？」

「みんながしてはいけないことや、しなければならぬことの総体だ。社会をしばる規律というか暗黙の了解のようなものだ。個人や家族が勝手に抱く幻想ではないものと言ったらわかるかな？」

「わからないわ」

「ムラに住んでいるとして、あそここの山には魔物がいるから行ってはならないとか、巫女様の言うことには従わなければならないとか、祭りのときにはドジョウを食べなければならないと言ったらどうだ？」

「それなら、理解できるかも」

「そういう共同幻想が国家の成立につながり、個人や家族を支配することを吉本隆明は説いたんだ。でも、このことをお母さんに言ったらだめだよ。誤解されるかもしれないから」
「わかったわ。ところで、最近の学者ですごい人はいないの？ テレビに出ている脳科学者とか心理学者とかは？」

「どうだろうね。見た感じと実際に接した場合の印象は違うことが多いから、わからないね。ただ一つ言えるのは、テレビにしょっちゅう出ている人は、現役の研究者ではないということだ。研究をして何かを解明しようと思ったら、テレビに出ている時間はないだろう。本をたくさん出しているといっても、どれも似たような内容で、他人の成果をまとめただけということもあるからね。具体的に誰がどうと言えるほど知らないけれど」

「この人すごいっていう人がいたら、そこへ行って勉強してみたい」と由紀は言った。

「でもね、すごい先生がよい先生とは限らないよ。優れた研究者は学生を利用して成果を出したいと思っているかもしれない。とくに有名な先生ほど業績を上げたいと思っているから、その傾向は強い。それを覚悟して、修行に行くのならよいけどね」

「むずかしいものね」

「君は優しい性格だから、何か楽しい職に就いて欲しいな」と私は言った。実際、私は由

紀に幸せになってほしかった。ただ、どうしたらよいのかは、私にもわからなかった。

土曜日にサッカーの指導をした。各自が考えてきた相手を抜く方法について、一対一で実践させ、合計十回のうちの成功率を記録した。抜き方についての知識などなかったが、実際に相手を抜くことができた方法は優れていると考えた。選手たちは必死にやっていたので、よい練習になっただろう。

この成績によって次の練習試合のポジションを決めた。私は抜いた成功率の高い選手をオフフェンスに、抜かれた割合の低い選手をディフェンスに使うことにした。ただでかくて、走るが遅い子はゴールキーパーにした。何をやっても下手な子もいたが、それには眼をつぶった。『サッカーの教え方』には、下手でも怒らずに、やる気を出すようにせよ、と書いてある。選手はぎりぎりの十一人しかいないのだから、贅沢は言えない。選手の配置も強引だったが、こいつらについての予備知識といたら、翔太が由紀の弟だというくらいしかなかったので、私の方法は合理的だと思った。ぶつくさ言う奴もいたが無視をした。チームの中で、二人だけ上手い子がいた。パスやシュートの技量が並外れていた。しかも、ディフェンスも上手いはずなのに、私の考えを読んで、ディフェンスではわざと失敗した。私はこのうち明彦をフォワードに、敏孝をミッドフィールダーに据えた。

オフフェンスとディフェンスと言っても、試合では両方必要だ。私はそれぞれが苦手な子に、さらに努力して練習しろと指示した。理恵は、オフフェンスをしたかったのにディフェンスに回された子をなぐさめたり、私の指導に不満を言う子に我慢するように諭したり、マネージャーとして頑張っていた。練習試合は夏の終わりに行うつもりだった。

さらに理恵は私のアパートにやってきては食事をつくったり、掃除をしてくれたりした。この日も練習が終わってから、二人で鍋を食い、テレビを見た。

「ねえ、この俳優はどう。かっこいいと思うんだけど」

「こいつは二世タレントだろう。親のコネで有名になった奴は嫌いだ」

「それじゃあ、このアイドルはどう。女の子に人気があるのよ」

「男は興味ない。今日は男の顔ばかり見たので、うんざりだ」

「私、かわいい男の子が欲しい」

「……………」

「でも、男の子ができたら、次には女の子も欲しいな。子供はたくさんいた方がいいわ」

「その意見には反対だ」

「私はね、子供がにこりと笑う瞬間が大好きなの。だから、小さな男の子と手をつないで歩きたい。スーパーにいっしょに行ってアイスクリームを食べたり、お庭でサッカーボールを蹴り合ったりしたい。そうだ、かわいい犬も飼おうかな。男の子とそのワンチャンといっしょに公園に行って遊びたいな」

「……………」

「男の子だったら、嵐の大野君や関ジャニの大倉君のような感じがいい」

私は理恵が絶えず話しかけてくるのが煩わしく感じていた。女は皆、このようによく喋るのだろうか。いや、そんなはずはない。由紀は必要なことしか喋らない。

「あなたのコーチぶりは素敵よ。何と言っても、暴力を振るわないのがあるがたい。チームが強かった頃のコーチは、選手を殴ったり蹴ったりしたので、選手やその親からクレームが付けられたのよ」

「あんなガキどもに触ったら、手が汚れるだろう。それが嫌なだけだ。それに最終的にチームが強くなるのが弱くなるのが、知ったことではない。嫌なら、いつでも辞めてやる」

「文句を言っているのではないのよ。このまま好きなようにやってもらえばいいだけ。でも、暴力だけはやめてちょうだいね」

私はいんざりして、寝たふりをした。それでも理恵は何かぶつぶつ喋っていたが、聞くうとしなかったので、何を言っていたのかわからなかった。

そうこうしているうちに、夏休みになった。町中に子供があふれる、一年でもっともうつとうしい季節の到来だ。私はスーパーで不快な思いをしてから、この地域の地図上に要注意エリアを設定していた。小学校や幼稚園はもちろん、その通学路も気をつけなければならぬ。あるとき道を歩いていたら、向こうから低学年の小学生の一群がやってきた。そして、その中の一人がすれちがいざまに、私につばを吐いた。私にかけようとしたのか、ただ吐いたら私に当たったのかはわからなかった。ズボンが汚れ、私はその子を睨んだが、そいつは謝りもせず、笑いこぼるばかりで相手にされなかった。ほんとうに恐ろしかった。

ふだん私は要注意エリア、要注意時間を避けていた。ルールさえ守れば、子供の群れにあたることはなかった。子供が幼稚園や学校にいる午前中は、私ものびのびと過ごせた。ところが夏休みになると、このルールが一変し、至る所に、また至る時間に子供が現れるようになった。避けようがないのである。私は外出するときは始終びくびくし、遠くに子

供の姿を見つけると、それを避けるために道を引き返したり、行く必要のない方向へ曲がったりした。

盆休みになった。実家に親戚が集まって宴会を開くのでお前も来い、と父に言われた。私はわずかだが親に仕送りをもらっている。行かなければ、それを止めるという。仕方がないので、私は帰省した。宴会の直前に行って、直後に戻る計画を立てた。

私の実家は海沿いの町にあった。二百戸ほどの集落の中にあり、元は地主の旧家であった。屋敷は大きく、広い庭があった。広間には四十人も席が用意され、ご馳走が並んでいた。名前も知らぬ親戚やその子供がやってきた。ほんとうに嫌だった。

私は人と顔を合わせないように、自分の部屋に隠れ、大多数が着席したところで、空いている席を物色した。幸いに、子供が隣におらず、周りに知った親戚がいない席を見つけたので、そこに着席した。

乾杯が終わると、いきなり隣のおじさんが声をかけてきた。

「健史君、大きくなったなあ。まあ、一杯飲めや」と言ってビールをごぼごぼと注いできた。

「はあ」と言って、私はビールを飲み干した。

「いい飲みっ振りだ。さすが剛さんの息子だ」

「とてもむずかしい大学に行つとるそうよ。末は学者か大臣ね」そうやってきたのは、向かいのおばさんだ。確か母の弟の嫁の姉だったような気がする。

「そうか、それは楽しみだな。おい、卓也、お兄ちゃんに挨拶しろ。将来お世話になるかもしれないから」と隣のおじさんが左の席にいた子供に声をかけた。それにしても、このおじさんは誰なのだろう。

卓也という子は立ち上がって私の方に近づいてきた。私はめまいがしそうだった。卓也は私の後ろに座り、その膝は私の尻にあたった。

「よろしく願います」と卓也は言った。周囲の大人たちの視線が私に集まっていた。私はつくり笑いをして、「おお」とだけ応えた。

「卓也、おまえが大学行く頃には、健史さんは教授かもしれん。大学受からせてくれるかもしれないから、仲良くしてもらえよ」とおじさんの横のおばさん、つまり卓也の母親が言った。卓也はにこりと私に向かって笑ったが、その笑いには私を馬鹿にしているような嫌味があった。

そこへ私の姉の真知子が生まれて五ヶ月の赤ちゃんを抱えて、私たちのところにやって

きた。赤ちゃんはどんなに醜くても、かわいいと言わなければならない。黙っていると敵対的だとみなされてしまう。そこが恐ろしい。

「ほうら、さくら、おじさんの健史よ」

「かわいいね。将来はミス日本だなあ」と隣のおじさん。

「あばばばー」と隣の隣のおばさん。

「ほうら、愛嬌があるでしょう。健史と正反対だわ。健史は無愛想でご迷惑をおかけしています」

「いやいや、大物になる男子はこうでなくちゃいかん。坂本竜馬みたいに堂々としていて立派だよ」とおじさん。

「さくら、この子が卓也君よ。かつこいいでしょう。将来お嬢さんになるかもしれないわよ」

卓也は勝手に照れている。

「健史君はもてるでしょう。彼女はいるの？」と向かいのおばさんが訊いてきた。

「いませんよ」面倒なのでそう答えた。

「やはり今は勉強するときだ。大物になるには、学業に専念しないと。卓也も見習えよ」と隣のおじさん。

「真知子ちゃんも、もつと子供を生んで、少子化の日本に貢献してくれよ。うちは経済的に苦しくても、五人もつくったんだよ。一人や二人ではだめだ」と向かいのおばさんの横のおじさん。

その横には確かに似たような顔をした子供が五人並んでいた。

「うちは卓也一人で悪かったな。今は子だくさんの時代ではない。一人でも大切に育てればいいんだ」と隣のおじさん。

「それでは日本人が減ってしまうではないか。金があるならもつとつくれ」と子だくさんのおじさん。

「何だと、貧乏人の子だくさんが偉そうなことを言うな！」

私はいいかげん嫌になったので、帰ろうかと思った。そこへ父がいきなり立ち上がった。「さあ、これから夏のお年玉大会だ」と言った。もつと後でやるつもりが、トラブルが生じたので今になったようだ。子供たちが「わあー」と声を上げた。お金を入れた封筒を父がばらまき、皆が一斉にそれに飛びつくという趣向だ。どの封筒にいくら入っているのかはわからない。うまくすると、十万円入っているらしい。私はせっかくだから、これをも

らってから帰ることにした。

大会は一家族二人まで参加することができ、隣の部屋で行われた。一人一封筒しか取ってはいけないので、高額封筒を手に入れるためには、封筒の見極めが必要である。厚そうな封筒を一瞬のうちに判別しなければならぬ。私は、父が封筒の束を放ると同時に、一瞬のうちに厚い封筒を見極め、その一つに狙いを定めた。手を伸ばしてその封筒を取ろうとした。ところが、その封筒を取ろうとするもう一つの手があった。卓也だった。私たちは一つの封筒を引っ張り合う形になった。

父が私を睨み、皆の視線が私たちに集中したので、私は遠慮した。次の瞬間には、卓也が「十万円獲ったぞー」と叫び、皆が拍手した。私が代わりに拾った封筒には、千円しか入っていないかった。まったく、このガキがいなければ、と思ったが仕方がなかった。

気分が悪くなったので、村のカフェ兼居酒屋に行った。夜になると、田舎者が集まって、ああだこうだと、くだらない世間話をするのだろう。それで誰かが怒鳴ったり、偉そうなことを言ったり、泣いたり、嗤ったりするのだろう。そういう情景が名前の付いたウイスキーボトルから思い浮かんだ。しかし、今は誰もいない昼間。一人静かにコーヒを飲むのにちょうどよかった。

ところが、その窓からぼんやりと海を見ていたら、同級生だった泰三が子分を連れてやってきた。

「よう、健司、久しぶりだな」

私はしぶしぶ「よう」とだけ返事した。

「こいつが前に言っていた健司だ。お金持ちのおぼっちゃんだ。俺とは中学校までずっとクラスメイトだったんだぜ」と泰三は子分たちに言った。

それはそうだろうと思った。このあたりの小学校も中学校も、クラスは一つだけだった。

だから、全員クラスメイトだったのだ。特別なことではない。

「健司は俺の言うことは何でも聞いてくれたんだ。お金もくれたし、一度は家の壺も持ってきてくれたんだ」と泰三は自慢した。

「俺たちも欲しいです」と子分たちが言った。

泰三は中学校を卒業した後、大工の見習いになったはずだ。子分たちも大工なのだろうか。陽に焼けた顔や腕を見ると、外で働いていることは間違いない。しかし、それにしても柄が悪い、と思った。泰三は体が大きく、悪がきだった。私は泰三に逆らうことはできず、形だけ従っていた。大学に入ってからには会うこともなくなったので、嬉しかった。そ

の泰三にこんなところで遇ってしまったのだ。

そこへ姉の真知子が入ってきた。

「やはり、こんなところにいたのね。お父さんは怒っているわよ。勝手に抜け出して」

私は「泰三に会いにきたんだ」と嘘をついた。

「あら泰三君、すっかり真面目になって働いているそうね。健司は変わった子で、お友達もいないようだから、これからも仲良くしてやってね。この子は強がりばかり言うけれど、ほんとうは寂しがりやなのよ。だけど社交性というものがまるでなくて、うちの父も母もとても心配している。このままでは社会に出てちゃんとやっていけるか疑問だわ。泰三君のような陽気さや強さがあればよいのだけれど。その点、お願いね」

「お姉さん、まかせてください。俺たちは一生の親友です。健司のためなら、何でもやりますよ。そうだ、今日は俺の家で宴会をするから健司も来てくれ。お姉さんもどうですか」「用事があるので、大学に戻る。あとはご自由に」私はそう言って店を出た。

大学のある町に戻るために新幹線に乗った。私は自由席の通路側に座ることができた。窓側にはすでに誰かが座っていたが、真ん中と通路側は空いていたからだ。次の駅では大勢の乗客が乗り込んできた。お盆だから仕方がなかった。親子連れが席を捜していたが、まとまって座れる席はなかった。そこで女の子だけが私の隣りである真ん中の席に座ることになった。

その子とはときどき立ち上がったは、離れた席の母親の方を振り返り、「そっちへ行きたいよー」と叫んだ。やがてその子は我慢しきれずに立ち上がり、母親の席に行こうとした。いきなり私の足の甲を踏みつけ、私の膝に手をおいて、私の前を横切って行った。母親はその子の頭をなでて席に戻るようになだめた。女の子は、また私の前を横切って行くので、膝を触られないように手でガードしたが、その分強く足の甲を踏みつけられた。

席に着いて十分くらいすると、その子は再び私の前を横切ろうとした。私は頭にきて怒鳴ろうと思ったが我慢した。周囲の目が怖かったからだ。その子はそのまま母親のところへ向かっていった。同じことが何度も続いた。私は足を踏まれないように、女の子が通るたびに足を引っ込めた。

夏休みになった頃、時間がたつぷりあるので、サッカークラブの合宿をしよう、と理恵がうるさかったが、私は拒否した。暑い中で練習をして、一人でも熱中症で倒れたら、私の責任になる。それに、私自身暑いのは苦手だ。何時間もグラウンドにいるのは真っ平だ

った。いくつか基本的な課題を与え、そのうえでメッシが活躍した試合のビデオを配って、メッシと同じことをできるように練習しておけ、と指示を出しておいた。理恵には帰省すると行っておいだったので、しばらく会わなくてすむ。サッカーのことも考えなくてすむ。

静かに過ごしたいと思って、近くの池に釣りに行った。ヘラブナが放流されており、無料の市民釣堀となっていた。三百坪くらいの広さがあり、岸にはいくつもの釣り座が設けられていた。朝の七時だというのに、すでに十名ほどが釣っている。私は周りに他の釣り人がいない釣り座を選び、竿を伸ばした。餌は水で溶けばよいだけのグルテンにして、それを丸めて二本の針につけて投入した。浮きと錘のバランスは調整済みであり、水深もだいたいわかっている。そのうち、ヘラブナは食いつくだろう。

「兄ちゃん、釣れるかい」と、どこかのじいさんが後ろから声をかけてきた。

「始めたばかりなのでわかりません」

「隣で釣ってもよいか？」

「どうぞ」

そのじいさんは、竿受けを固定し、釣り出した。

「今日は濁りがなくて風も弱いので、よく釣れるぞ。この二、三日、水が濁りすぎて今一つだったからな」

どうも毎日来ている常連のようだった。逆らうと面倒くさいことになる。

「兄ちゃんのタナは少し浅いな。宙釣りよりも、底につけた方が食いがよいぞ」とじいさんは人の釣り方にケチをつけてきた。

「わしはこの池で三十年釣っているからな。このヘラブナのことは誰よりもよく知っている。ほら、釣れたよ。こいつは良子さんだな。きのうも釣れたやつだ。可愛い顔をしているわい」

じいさんは高そうな長い竿で沖の方を攻めていた。私を持っていたのは三千円の安竿で、一間半の長さしかない。岸から近い場所を攻めるしかなく、不利だった。しかし、私は頭に来ていたので、何も言わずに、浮きに集中した。じいさんよりたくさん釣ってやろう、と思ったのだ。しかし、浮きはぴくりともしない。そこで、グルテンを大玉にして、浮きから針までの長さをさらに短くしてみた。

「そんなでかい餌にヘラブナが食いつくわけがないだろう。小さくせんかい」と爺さんは言ったが、私は無視をした。

すると、私の浮きがいきなりズドンと沈み、すかさず合わせるとよい型のヘラブナが釣

れた。じいさんは見ていないふりをした。その後も、次から次へとヘラブナがかかり、釣り方の変更が功を奏したようだった。一方、じいさんは「良子さん」の後、まったく釣れなくなった。

「釣り方も状況によって変えた方がよいのでしょね。今日は宙釣りが正解ですよ」と私は言った。

じいさんは黙ってしまった。一時間の後に私は十対一で大勝利した。

そのとき、じいさんのところに男の子が二人やってきた。小学校低学年に見えた。

「おやおや、怜人ちゃんに海斗ちゃん。池に落ちないように気をつけてね」

こいつらはじいさんの孫のようだった。

その子らは石を拾うと、池の真ん中めがけて思い切り投げ始めた。じいさんは「これこれ、石を投げたらいかんよ。投げるなら岸近くに放りなさい」と言った。

すると、その子らは私の方へ石を投げ始めた。じいさんは見ないふりをしている。

私はじいさんを睨み、「釣れなくなるではないですか。自分の孫なら、馬鹿な行為には責任を持って注意してください」と言った。

「あー怖い。僕たちもああいうお兄さんには気をつけようね」とじいさんは言い、ガキたちは「はーい」と返事した。

じいさんは竿をたたみながら、さらに隣のじいさんと大声で会話を始めた。

「でかい餌をつけて、撒き餌みたいなことをする奴がおって迷惑だ。撒き餌はここでは禁止されているのに」

「しろうとに言ってもしょうがないだろう。最近の若い者はルールを守らないから」ともう一人のじいさん。

「常識がわからない若者には困ったものだ。かわいい子供を馬鹿と言うとは。親のしつけがなっていないから、こういう愚か者が増えるんだ。よし、今日はここまでだ」

じいさんは、掃除のために釣りを禁止すると宣言し、長い棒で池の中のゴミを取り始めた。

まったく釣れなくなってしまったので、私は竿をたたんだ。帰り際に「常識がわからないのはどっちだ。釣りに負けて悔しいのか」とじいさんに言って、釣り池を後にした。静かに過ごすつもりだった時間がだいなしになってしまった。

翌日、『共同幻想論』を由紀に渡した。

「帰省はどうだった」

「ひどい目に会ったよ。子供に足を踏まれつづけたんだよ」と私は新幹線の中での出来事を話した。

「それなら先生の席をお母さんに譲ってあげればよかったのに」

「そんなことは思いつかなかった」

「そうすれば、周りの人達も先生のことを尊敬したのに」

「人に尊敬されるために生きているのではない」

「ふるさとお友達に会えて楽しかった？」

「ふるさとに友人なんかいないよ。幼なじみには会ったが、うっとうしいだけだった」

「私もよいお友達がいないの。学校では頭が悪くていらいらする子か、真面目なだけの子ばかりで退屈。なかには陽気で、その場を盛り上げようとはしゃいでばかりいる子もいるけれども、それもうざい。他人は私がやりたくないことをやらせようとするし、私を自分にとってつごうのよい人間にしようとする。それが嫌なのよ。頭がよくて会話を楽しめるロボットでもないかしら」

「僕はロボットということかな」

「先生は尊敬している数少ない人間だね。思いもよらないことを教えてくれるから、とても大切な人よ。これからももっと勉強して、私にいろんなことを教えてね」

「サッカーコーチをしてから、本を読む時間が減ったような気がする」

「理恵さんと付き合っているからでしょう。翔太に聞いたわよ。でも、あまり夢中になつて自分をなくしてはだめよ。こういうことで人生をだいなしにすることもあるから」

「理恵はくだらないことをよく喋る女だ。正直飽きてきた」

「あらまあ。やることはやったのでしよう。それで飽きたとは身勝手なものね」

「そういうことではない。静かにしたいときに、ぺちやくちや喋られると疲れるんだ。それも、ジャーニーズがどうだとか、ドラマの主人公がこう言ったとか、記憶する価値のないことばかりなんだ」

「先生はちよつと暗すぎるかもしれない。何でも悪い面ばかり見ないで、少しはよいところも見つけて調子を合わせることも必要だと思う」

「うーん。そうかもしれないし、そうでないかもしれない。よく考えてみるよ」と言っ、その日の家庭教師を終えた。

なんとなく気分が晴れないので、騒ぐ子供お断りの蕎麦屋に行った。午後二時過ぎだったので、ほかに客はいなかった。

「よう、いらっしやい」と店主は私を見ると近寄ってきた。

「お店はどうですか」

「ぼちぼちだな。あまり混むのは嫌だから値上げしたんだ。そうすれば、子供もあまり来ないだろう」

「騒々しいのは御免です。周りで騒がれると蕎麦がまずくなりますよ」

「最近、学校でのいじめが問題になっているだろう。騒々しい子供は学校でも弱い子をいじめるんだ。そして、大人になったら、人をこきつかい、脅して得をしようとする卑しい人間になるんだ」

「私も子供の頃にいじめられたんですよ。金持ちの子供というだけで、囃し立てられたり、無視されたりした。外国人とのハーフだとか、太っていると、眼鏡をかけているとか、何かちがうところがあると、いじめの原因になるんですよ。子供は心がきれいだと言われることが多いですけども、嘘っぱちですよ。大人の方が分別があるから、それほど残酷なことはしないものです」

「いじめっ子は隔離教室をつくって、いじめられる苦しさを教えてやればいいんだ」

「静かに一人で過ごすことを学習するべきですね」

そのとき、三人の家族連れが店に入ってきた。

「あの、うちの子は大人しいので、お蕎麦を食べさせてもらえるでしょうか」と父親が店主に聞いた。

「…：騒がないならいいよ」と店主は、後ろにいた子供を見て言った。

その子供は太っていて、一見強そうだったが、その振る舞いは何か怯えているようだった。

「お兄ちゃんは立派な体格をしているねえ。何かスポーツをしているのかい」と店主が聞いた。

「この子は太っているものだから、相撲取りになるのかとか、柔道で金メダルを取ろうとか、よく言われるんですよ。でも、とても優しい子で、人と戦うなんて考えられないのです。今日のように外出して、知らない人と会うのもつらいようです。静かで、うるさい子供がいけないという評判を聞いて、ここへ来てみたんですよ」と母親が言った。

「名前はなんて言うんだい？」と店主が聞いたが、その子は父親の後ろに隠れて何も言わ

ない。

「光一です。よろしくお願ひします」と父親が代わりに答えた。

「まあ、お入りなさい」と店主は言い、席に案内した。

席に着いた母親は、隣のテーブルにいた私にも深々とお辞儀をして、「よろしくお願ひします」と言った。店主は注文を聞き、蕎麦の調理に取りかかった。私もまだ蕎麦を食べていないことに気づき、天せいろを注文した。

「もっと気楽にしたらよいですよ。ここに居るのは優しい人ばかりですから」と私は言い、その瞬間に自分も優しいだろうかと自問した。

「光一は学校でいじめられているのです。気が弱いもので、大勢に何か言われると何も言い返せなくなってしまうようです。先生は光一の心に問題があると仰っており、私どもはどうしたらよいのか悩んでいます」と母親が言った。

「光一君は何が好きなんだ？」と私は思い切り優しい顔をして訊いてみた。

光一はもじもじしていたが、母親にうながされて「鳥とサッカーです」と答えた。

「鳥を見るなら、ここは最高だよ。ほら、小鳥たちがたくさん来ているだろう」と店主が言った。実際、窓の外の餌場に、今日はヤマガラとカワラヒワが集まっていた。

「すごい、いっぱいいる」と言って、光一は窓にへばりついた。

「サッカーを見るのが好きなのか？」と私は聞いた。

「いや、ボールを蹴るのが好きなのです。でもお友達がいないので、家の壁に向かって蹴ったり、一人でリフティングをしたりしています」と母親が答えた。

「ほら、蕎麦ができたよ」店主が蕎麦を運んできた。細切の十割蕎麦は繊細で香りがすばりしかった。光一もおとなしく蕎麦を食べた。

「サッカーは相手がいなくともしろくないだろう。クラブに入ったらどうなんだい」と店主が言った。

「学校のクラブは、上級生が威張っているうえに、同級生も意地悪をするので、とても入るのは無理です」と父親。

「どうして、いじめなんて許すのかなあ。教師は何をやっているんだ」と店主。

「先生方は面倒なことには関わりたくないようです。光一のために尽力してくれる方はおられません」と母親。

「実は私はあるサッカークラブのコーチをしているんです。強くはないけれども、いじめはありません。よかったら、一度来てみませんか」と私は誘った。

両親は喜んで、すぐに光一の参加がきまった。私は自分自身、こういう提案をしたことが不思議であった。

アパートに戻った私は、まとめて読書をしようと思った。知性のバイオリズムが低調期に入っており、いくら本を読んでも疲れぬ時期だった。夏休みの混雑を避けて部屋にもり、一日中本を読みたいと思った。家にこもったまま、誰とも話をしないことには、慣れていた。二週間こもったこともあるが、便秘がひどくなった。

一日、千二百ページ読むとして、四日で五千ページくらい読めるはずである。そのために、必要な本を本棚から集めた。買ったけれども読んでいない本がけっこうあった。同じ傾向の本ばかり読んでいると飽きてしまうので、小説、随筆、科学、哲学など、様々なジャンルのものを混ぜることにした。

小説はできるだけ長いものから読んでいこうと思い、すでに『失われた時を求めて』、『風とともに去りぬ』、『戦争と平和』などは読み終えていた。そこで、今回は『魔の山』と『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』、それに『哀愁の町に霧が降るのだ』を読むことにした。哲学書としては、『純粹理性批判』と『善の研究』、サイエンスでは『ホロン革命』と『個性の生態学』、そのほか歴史関係では『ハーメルンの笛吹き男』、評論では『チベットのモーツァルト』を選んだ。

読み始めてみると、『善の研究』はさっぱり理解できなかったが、ほかはどれもおもしろかった。大学で馬鹿な教授の講義を聴くより、本を読んだ方がよほど勉強になる。わからないところはすつとばし、わかりすぎるところもすつとばす。著者がくだらないと思ったり、またすつとばす。これが速読と呼ばれるものなのかどうかはわからなかったが、内容次第で好きなように読み方を変えるのだ。

その間、私は理恵には会わなかった。読書に集中したときに、うるさい女は邪魔だからだ。その後、理恵はアパートにやってきて、さんざん文句を言った。

「携帯にも出ないし、何をしていたのよ。連絡くらいできないわけ？」

「いや、実家では母が病気で、手が放せなかったのだよ。ほんとうに忙しくて大変だったんだ。毎日大勢の友人が訪ねてきて、その付き合いにも疲れたよ」

「私を呼んでくれれば手伝ったのに」

「いや、そういうわけにもいかないよ。クラブの世話もしなければならなかっただろう」

「そうよ、コーチはいなかったけれど、何回か集まって練習したのよ。みんな十メートル

先的にボールを当てることができるようになったし、早く練習試合をしたいと言っていたわ」

「メッシのようにと指示したのに程遠いな。試合は涼しくなったらやるから、それまでは練習だ」

「来週の月曜日には来てちょうだいよ。皆集まるから」

その練習に光一も参加した。盆も終わって少し涼しくなっていたので、熱中症になることもないだろうと思った。光一が来る前に、メンバーには、決して笑ったり無視したりしてはいけない、と言っておいた。特に明彦と敏孝は光一をいじめそうに思えたので、個人的に注意した。

光一は髪の毛を五分刈りにしてやってきた。本人なりの覚悟を持ってきたのだなと思っただ。母親が遠くから見つめていた。リフティングをやらせると上手かった。さすがに、いつも一人で練習していると言うだけのことはある。太っているにもかかわらず、ドリブルも速かった。

私は五対五のミニゲームをやることとし、光一もそのメンバーに加えてみた。ところが、光一は相手が接近してくると、逃げてしまった。ボールの方へ走って行くものの、相手が近づくと、そこで止まってしまい、競わなかった。

「光一、どうして逃げるんだ。お前の方がでかいのだから、ひるまないでボールを取りに行け」と私は怒鳴った。

相手側のメンバー、特に敏孝は、光一を甘く見て、わざと光一の方へボールを蹴り出し、そこから突破するようになった。みるみるうちに得点を重ねられた。「あいつ、弱いぞ」と言う声はどこからともなく聞こえてきた。光一はしょぼんとしていた。

私はゲームを中止し、グラウンド上に輪を描いて、土俵をつくった。

「よし、これから相撲大会だ」と言い、全員を闘わせた。皆はおもしろがって、相撲を取り始めた。光一は外から見ていただけだったが、やがて私の指示によってしぶしぶ土俵に上がった。相手は小さいが闘志満々の下級生だった。

相撲となると、体格がものを言う。その下級生がいくら押ししても、光一はびくともしなかった。やがて、光一が何もしないうちに、相手は勝手にこけてしまった。反動をつけて突っ込もうとして、足がもつれてしまったのだ。

一度、勝つことによって光一は自信をつけたようだった。次の相手は、ぶつかってから少し体をあずけただけで倒すことができた。さらにその次の相手は、光一のふところにも

ぐりこんできたので、上からつぶして倒した。しまいには、つっぱりまでするようになり、結局、誰も光一には勝てなかった。翔太は光一を恐れて対戦しなかった。明彦と敏孝は光一の戦い方を見つめていたが、強そうだとわかると、翔太と同様に土俵に上がらなかった。そのときから、光一のサッカーにも変化が見られるようになった。少しずつだが相手を恐れなくなり、ボールを奪いに行った。光一は上達していった。上背があるので、ヘディングも強かった。私は光一を守備側の中心に据えることにした。そして、秋になったら光一を入れて対外試合をすることにした。私がチームの強化に取り組んでいることを理恵は喜んだ。

私は光一のことを由紀に話した。

「先生が親切なコーチとは驚きだわ」

「いじめられている子は助けてあげたいんだ」

「子供がすべて嫌いなわけではないのね」

「もちろんだよ。いじめそうな子供が嫌いなだけだ。ところで、『共同幻想論』は読んだ？」
「むしろかかったけれども、何か刺激を受けたような気がする。初めは、よい成績を収めてよい大学に行くというのが共同幻想なのかと思っただけでも、どうやら違うらしい。だって、うちの高校からよい大学に進学できるのは数人だけだから。そうではなくて、周りの大人の言うことをよく聞き、問題なく高校を卒業して、この社会に適應するのが共同幻想なのね」

「そして、できるだけ早く結婚して、たくさんの子供をつくる——か。落ちこぼれたり、いじめられたりする子は、その子達に問題があると考えるのだよ。いじめを見ても見ないふりをする教師の背後には、弱い子は共同体にとって不利益だから排除した方がよいという見方があるのかもしれない。だから、落ちこぼれてはいけないという心理的圧迫が、子供たちをますます追い込むことになる」

「最近では、一人の子を大勢でいじめるでしょう。いじめる側に立たないと、自分もやられるから。それで先生もいじめる側に立ってしまうのかもしれない。いじめられている子の側に立つと、先生もクラスの大勢を敵にすることになるし、その大勢を処分するとすると、その親たちは黙っていない。行き着く先は学級崩壊だわ。先生も気の毒ね」

「それなら、どうしたらいいと思うんだ」

「いじめの核になる子を処罰するか、学校を自由に辞められるようにしたらどうか。と

りあえずは、誰でもいじめを通報できる仕組みを学校外につくり、将来的には義務教育をなくせばいい。大きささまざまな自由スクールができて、嫌だったら学校を変えられるようにするのよ」

「なるほどね。いじめようとする心は誰にでもあるから、制度を根本的に変えることが必要かもしれないね。弱い人間や共同幻想に合わない人間は、昔から迫害されてきたのだからうけれども、今こそそれを変革しなくてはならない」

「それならば、共同幻想そのものが悪いのかな。そういうのって、いつ誰が夢見たの？」

「それはわからないね。吉本隆明は古事記や遠野物語をよく引用しているから、その頃に強く現れたのかもしれない。古くは弥生時代にムラができたときに形成され、その後、身分のちがいが固定化されたときや、軍国主義の時代に強化されたような気がする。共同幻想は集団によって異なり、それがどのようにつくられたのかは明らかでない。よい共同幻想もあったのかもしれないが、大半は身分や貧富の差を固定化するものだったろうね。それはどこかの権力者たちがつごうのよいものとして考えたのだと思う」

「ふーん」

「吉本隆明は、共同幻想は人間以外の動物にはない、と考えたけれども、原始的なものはサルやサカナにもあるのではなからうか。ニホンザルの雄の大半は、いずれ生まれた群れを去るのだが、それは共同幻想みたいなものではないかと思う。そもそも、生物はそのほとんどが外敵や病気のせいで早死するのだから、生存にとって意味がないことは原則としてしないことになっている。いじめなんか当たり前。親切的な生物など進化の過程で生き残らないのさ」

「それは現在ではどうなの？ 今は外敵なんかいないから闘う必要はないし、むしろ皆にやさしくというのが風潮ではないの？」

「確かにときどき、ほんとうに親切な人っているよね。でも大半は、見返りを求めたり、自分の評判を高めたりしたいだけではないかな。進化の中で蓄積されてきた本能や長年築かれてきた幻想はそう簡単に崩れないのだよ。平和な日本だけど、いつまた戦争に巻き込まれるかわからない。そうなれば、勇ましく闘えない者はクズ扱いされるのさ」

「私は見返りがなくても、誰にでも親切になれる人間になりたい。あつ、これは宮沢賢治の『雨ニモマケズ』みたいね。いじめられる子は、ほんとうはそういう優しい子なのではないかな」

「誰でも欲があるから、そう簡単に親切にはなれないよ。自分が困窮しているときに、自

分を犠牲にしてまで他人に尽くすことはできないものだ。自分に不利益をもたらす奴を嫌うのも当然だ。そうでなければ、裕福でもないのにクリスマスにお金をばらまくような、いびつな自己満足ということになる。宮沢賢治も、純粹に親切になることがむずかしいから、そういう人間になりたい、と言ったのだ」

「それでも、誰にでも意地悪をするよりいいじゃない。ところで、共同幻想って時代や組織によって変わるのでしょう？ 現代日本の最先端の企業ではどうなのかな？」

「今だって、会社や組織が命令に忠実な人間を必要とすることに違いはない。ただ、グローバルな時代だから、会社も個人も創造性がなくては競争に勝てない。ただ、共同幻想の中で夢見ているだけではだめなのだろうね。アメリカの一流企業では、特別に変わった考えをする人間を一定数採用するらしい。同じ考えの大人しい人材ばかりだと、行き詰ってしまうのだろう。それに、共同幻想とか社会規律とか言いながら、実は他人を利用したり騙したりして、得をしようにするのが人間ではないかという気がするんだよ。共同幻想を大多数の意見とか権力側の思惑だととらえると、それにおもねることによって利益をえることができるからね。そういうものに利用されないためには、自分の頭で判断し、行動することが必要なんだ」

「もう受験なんかやめようかしら。馬鹿らしい」

「大学に行くことには意味があると思うよ。友だちもできるし、いろんなことを考える場所と時間が得られるからね」

「先生は教育者としてすごいかも。私は啓発されているし、サッカーチームも上達しているのでしょうか？」

「上達しているかなあ。それはわからないよ。ただ、教育という点では、学校ではもった意味があってもしろいことを教えるべきだな」

「学校では教わらないことって、何があるかしら」

「アイドルの追っかけ、農作業、バンド、釣り、骨董、アニメ、スポーツ鑑賞、バードウオッチング、ラジコン、ゲーム、カヌー、コスプレ、カラオケ、サーフィン、鉄道鑑賞、ダイビング、ミュージカル、ゴルフ、マジシャン、あとは男女関係とか」

「そういうのはクラブ活動や趣味でやればいいのでは？」

「確かに言いすぎたかもしれない。それでも手ほどきくらいはしてもよいと思うよ。学校では、皆が自分に合っていて、しかも夢中になれる将来の職業を見つけることが大事なんだ。そのためには、いろいろなことを体験すべきだと思う。数学の点数がちょっとよい

から理数系なんていうのは、哀しいよね。百歩譲って、会社勤めに必要というなら、お金にかかわることや現代の法律、それに日本語を書いたり、英語を喋ったりすることをものと教えるべきだ。それからね、金持ちは子供が小さいうちから習い事をさせるんだ。普通の勉強のほかに、ピアノ、英会話、サッカー、テニスなど。最近では、日本語の会話術や交際術、それに加えてお笑いまで習わせる親もいるらしい。それによって、子供のスキルを上げて、ますます金持ちにしようという魂胆だ。そういうことを考えると、さつき挙げた趣味のようなことは、誰でも同じラインから出発できるのではないかな」

「そうかもね」

「クラブ活動の問題点は、いじめの温床であることと、一つのことばかりやらせることにある。顧問の教師や先輩が恐るべき権力をもって下級生をしばりつけるのも問題だ。それから、クラブ活動や学校は辞めにくい。いじめっ子や嫌な先生がいても、逃れることができないんだ。この仕組みを抜本的に変えるべきだ」

「サッカーなんか、何の役にも立たないような気がするわ」

「運動しておけば、体が鍛えられて、将来糖尿病にならないかもしれない。健康で長生きすることも、大事なことだ」と私は言い、その日の家庭教師を終えた。

次の日の午後三時から大学で教授との面談があった。将来の進路指導に関して、希望する教授と三十分話をする機会が与えられたのだった。私には特に相談したい教授はいなかったが、このところ最先端の研究成果を発表しており、この大学では比較的有名だという進藤教授を選んでみた。進藤教授は大柄で額が広く、いかにも頭がよさそうな感じだった。著名な教授にしては、研究室は狭く、乱雑に本や書類が積まれていた。

「思ったより研究室は小さいですね」と私は言った。

「実験室の方にスペースを割いているからね。それに部屋の大きさは研究しない教授と同じなんだよ。おかしな話だろう。ところで君は何を聞きたいのかね」

「私は将来何をすべきか、まだわからないのです。何か研究のようなことをしてみたいのですが、その適性があるのかどうか自信がありません」

「それでは、私が試してやろう。次の三つのうち、君ならどれを選ぶか、答えたまえ。一、細かい作業が好きなので実験室で一日中作業してみたい。二、何をするか指示されたら嬉しい。三、一年くらい誰もいない山奥の洞穴で暮らしても苦にならない。さあどれだ」

「どれも嫌ですね。でも強いて選ぶなら三番です」と私は即座に答えた。

「三番か。社交的ではない答だね。これを選ぶ人は探究心に富んでいるので、研究には向いている。これからの人生において何か目標をつくって、それに向かっていくと、素敵な生き方ができると思う。でも、私は君みたいな学生を抱えるつもりはない」

「どうしてですか？」

「私にとって役に立たないからだよ。私は自分の研究を機械のように正確に進めてくれる学生が必要なんだ。だからといって、君が駄目な人間だと言っているのではない。ただ、私には向いていないのだよ。ほかの教授ならば、君みたいな学生の方がよいと思うかもしれないし、君も好きなことができるかもしれない。君がああしたい、こうしたいと思って、それがかなうかどうかは相手しだいだ。だから、何をするにも相手の気持ちを考えて行動しなければならぬ」

「はあ」

「そもそも私が何を考えているのかはわからないのだから、とりあえずは、どれも興味があります、と答えておくものではないかね。そうすれば、私だってもう少し君に興味を持ったかもしれない。しかし、どれも嫌だとか、三番がいいとか言われたら、もうだめだ。君が私に何の利益ももたらさないことは明らかだから、これ以上話をしてもしようがない。ともかく、自分中心的な見方、一通りの見方しかできないようではだめだ」

帰り道で、進藤教授も自己中心的だと思った。しかし、彼の言い方は陰湿ではなく、むしろ好感を覚えた。ただ、競争が厳しい世界では、周りを利用して利益を得ようとする人が多いのだ、と強く感じた。確かに、敵ばかりの中で生きるよりは、周りがすべて味方が生きやすい。

周りを利用して得をするというのは、まるでアユのようだな、と最近読んだ本を思い出した。もちろん、アユにも敵はいる。ブラックバスやナマズはアユを捕えて食ってしまうので、いない方がよい。しかし、その他の魚は、ウグイにしてもヤマメにしてもオイカワにしても、みなアユにとって好ましい。なぜならば、これらの魚は水生昆虫をたくさん食べるので、水生昆虫に摂食されるはずの藻類を増やすことになるからだ。アユはもっぱら藻類を食べるので、水生昆虫は少ない方がよい。だから、他の魚がいっぱいいるとアユの食物は増えるというわけだ。アユは周りから利益ばかりをえる、つごうのよい魚なのである。

一方、ほかの魚はアユがいると、藻類は減り石の上の水生昆虫も減るので、成長が悪くなる。しかも、アユと同じように藻類ばかり食べる魚は、日本の川にはいないそうだ。進

化の過程でアユに負けてしまったのかもしれない。そうだとすると、アユ以外の魚は、アユがいるところでは生きていけなくなるかもしれない、とその本を読みながら考えた。ところが、そうでもないらしい。アユがいてもいなくても、陸上の虫は川に落ちて魚の餌となる。水生昆虫のうち石の下面にすむものは、アユに影響されずに生き残り、それが流下して魚の餌になる。ほかの魚はそれらを食べて夏をしのげば、アユは秋になって産卵した後、死んでしまう。海や湖で育った次の稚アユが現れるまでは、のびのびと暮らせるというわけである。

アユにとって問題なのは、ほかのアユである。そいつらが藻を食べれば、自分が食べる藻は減ってしまう。だからアユは縄ばりをつくって、自分の摂食場所を確保する。弱いアユを追い払って、自分だけ生き残ろうとする。しかも、縄ばりアユどうしは互いをあまり攻撃することなく、そこに侵入して藻を盗み食いしようとする弱いアユを激しく追い払う。実験池では縄ばりを持ってないアユはつき殺されてしまうことがあるらしい。縄ばりアユはいじめっ子だな、と私は思った。

人間は山奥に一人で暮らすのでなければ、他人と関わり合い、いくらかのプラスあるいはマイナスの影響を受ける。マイナスの影響をもたらす他人とは関わらなければよいのだが、現実にはそうはいかない。

そんなことを考えていたら、道彦に出会った。

「今、教授と進路について話してきた」と私は言った。

「俺は女の多い会社に就職するんだ。パイロットや医者を目指しているのだがむずかしいから、企業情報を調べている。銀行やテレビ局もいいな」

「遊んでばかりいるのに、そんなところに行けるのか？」

「毎日合コンして遊ぶんだ」

こいつは若干のマイナスをもたらす友人だ、と私は思った。こいつの言うことから学ぶことは何もない。何の利益ももたらさないが、私をどうしようとするわけではないから、大きなマイナスではない。いつか結婚式のときにでも友人の数が足らなかつたら、道彦を呼ぶことにしよう。それならば若干のプラスになる、と思った。私は少し微笑んで道彦と別れた。

コンビニに寄ったら、あの要領の悪い女がいた。クビになっただけじゃなかったようだ。横目で様子を見てみると、客の弁当を見て「暖めましょうか」と言った。どうやら、学習したようだ。とろい子は直るが、いじめっ子は直りにくい、と思った。失敗した子が反省して

次には成功しようとするのに対して、いじめっ子はいじめたことがうれしくて成功したと思うから、いつまでもいじめをやめられないのだ。しかも、周りの大人がとがめないから、自分がまちがっていることに気がつかない。

その日の晩、理恵と食事をした。おかずを自由に選べる大衆食堂に行った。

理恵はメンチカツとマカロニサラダ、それに小ライスと豚汁を取った。私はカレーライズと味噌汁。

「もうすぐ誕生日だから、何かプレゼントが欲しい」

「何が欲しいんだ」

「バッグとかドレスとか、ネックレスでもいい」

「学生だから、そんなお金はないよ。家庭教師をしてやっと食べていけるのだから」

「貧乏くさいわね。もっと働いて稼ぎなさいよ」

「ボランティアでサッカーを教えているではないか。家庭教師でも苦勞している。学業もあるのだし、これ以上働けないよ」

「卒業したら、給料のよい会社に勤めてね。期待しているわよ」

私はうんざりして思った。この女は私にとってマイナスだ。いいかげん、関係を絶たなくてはならない。そうしないと私が壊される。

夏休みが終わって涼しくなってきたので、サッカーの対外試合を行うことになった。相手として、地区の中でもっとも弱そうなチームを選んだ。審判は無料でやってくれるという近所のおじさんたちに頼んだ。試合時間は体力を考慮して、三十分ハーフとした。

試合前に円陣を組み、気合を入れた。光一は何を思ったか、しこを踏んでいた。何だか強気で、相手をびびらせそうだった。一人つごうが悪い子がいたので、残りを全員先発させた。試合にあたって、団子になるのではなく、空いているスペースに走れ、そしてそのスペースに向けてパスを出せ、と指示を出した。光一には、相手のフォワードに体をぶつけてシュートをフリーで打たせるな、と言った。

それにもかかわらず、どちらも技術的にレベルが低いので、ボールをめぐる団子になり、パスも通らなかった。いろいろと教えてやったのに、試合になると向上が感じられなかった。

「何をやっているんだ。下手糞どもが。もっと頭を使ってサッカーをせんかい」と怒鳴ったのは私ではなく、近くで観戦していたじいさんだった。

「フリーの味方にパスをするんだ。相手に蹴ってどうするんだ」となかなか適切なことを言う。

「どういう馬鹿コーチに習っているんだ。まるでサッカーがわかっていない」と言うじいさんをよく見ると、ヘラブリナ池で出会ったじいさんだった。あのときの恨みを晴らしに来たのだ、と思った。

「基本がなっていないから、そういうことになるんだ。まぐれで上手くいくことがあっても、そんなのはだめだ。基本を大事にしろ」とじいさんはまた怒鳴った。そして、私を見てにやりと笑った。

ときおり、敏孝がよいパスを前線に出し、一度は明彦がシュートを放ったが枠をとらえ切れなかった。光一はやはり相手には恐ろしく思われたようであり、避けられているように感じられた。どちらが勝つのかはわからないまま、引き分けになりそうな後半のロスタイムに、ディフェンダーの光一が蹴ったボールが、敏孝につながり、そこからボールを受けた明彦がゴールを決めた。試合は1対0で私たちの勝利で終わった。

相手のチームは悔しくて泣くのかと思ったら、全員で喜んでいた。大敗すると思っていたら惜敗だったので、自分たちには実力があると思ったようだった。目標が低いとプラスが大きくなるのだ、と気がついた。

光一には「調子に乗ってはいけない。自信をつけても、弱い子をいじめてはだめだ」と釘を刺した。

この勝利は私の経歴には何のプラスにもならないだろうが、私は光一や他のメンバーにプラスを与え、さらに相手チームの選手にまで多少のプラスをもたらした。これはどういうことなのか、私にはわからなかった。全員がプラスなんてことはあるのだろうか。

例えば、ヒトとムカデの関係では、どちらも相手から害を受ける。ヒトはムカデに刺されると相当痛い思いをするが、ムカデはそのためにヒトに見つかると殺されてしまうかもしれない。ここではマイナスだけである。鳥と毛虫の関係では、鳥は毛虫を食うことによってプラスの影響を受け、毛虫は食われるのでマイナスの影響を受ける。関係によって、そこに関わる生物が受けるプラス・マイナスの総和は異なるのである。それはどうしてだろうか。そこまで考えたら、わからなくなって頭が疼いた。

私は子供が嫌いな蕎麦屋に行き、店主に聞いた。

「店主はこんな田舎で暮らしていて、寂しくないですか？」

「人づきあいは苦手だねえ。ずいぶん裏切られたから。よい関係でいたと思ってても、やが

て気まずくなることが多い。だから、よいときに関係を絶って、田舎にこもることにしたんだ。でもね、誰とも話をしないと精神的に辛いときがある。それでこの店を始めたんだ。客と雑談くらいできるだろう。でも、うるさい子供は御免なんだよ。酔っ払って人に絡んでくる、たちの悪い大人も避けたいね。酒が強いというだけで威張りちらして、弱い人間に無理やり飲ませようとする輩がいるだろう。あれも見苦しいな」

いろいろと考えた結果、私はサッカーチームのコーチを辞めることにした。子供たちの中には不平を言う者もいたが、私の本業は学生であるから仕方がないと諭した。そして次のコーチをヘラブナ池のじいさんに任せることにした。あのじいさんは、サッカーをよく知っている。ヘラブナをいじめるより、サッカーを指導した方が、皆に幸せをもたらすだろう。

理恵との関係は、このままでは悪化することが明らかだ。今のうちに付き合うのをやめよう。私たちの相性はいまひとつだった。

サッカーコーチを辞め、理恵と別れることを、由紀に話した。

「先生、社交的になってきたと思っていたのに、また元に戻ってしまうのね」

「サッカーとか女とか、そんなことにうつつを抜かしている場合ではない。最近やっていることが自分には何の得にもなっていないような気がしている。もっと真剣に将来のことを考えないといけない」

「いろいろな人と付き合うことによつて、助けてもらったり、想像できないくらい新しい展開がおきたりすることもあるでしょう。チームをつくって一つの目標に向かうのも素敵よね。それを嫌って、一人の殻にこもっているのは、何も進展しないかもしれない」

「……………」

「先生は裕福な家で育ったから、思考回路が単純なのよ。すぐに人のことを馬鹿だと言うけれども、自分だって受験に失敗したし、何をめざすのかもわからないじゃない」

「……………」

「そもそも、いい年をして子供が怖いなんて情けない」

「……厳しいことを言われちゃったな。自分のことは客観的に評価できないから、正直に言ってくれて嬉しいよ。君とは一生付き合いたいな」

「将来のことは約束できないわ。私にはもつとすばらしい男性が現れるかもしれないから」「そういうことを言っているのではない。話をしている飽きないし、勉強になる、と言っ

ているのだ」

「私もいい大学には行けないけれども、それほど優秀ではないから、それでいいの。けど、私も何かになりたいから、努力して自分の道を見つけてみせる。あなたにかまっている時間はないかもしれない。それに、あなたは目先の損得ばかり考えているようだがっかりだわ。そういうのを打算的と言うのよ」

「……………」

「人は変わるのだから、もっと長い目で人間関係を見て、そのうえでその先を考えればいいと思う。元気で活発な男の子をうるさいと批判するのは勝手だけれども、何か困難な状況で身の危険もかえりみずに局面を打開するのは、そういう性格の子ではないかな。おとなしくて喋らないような子は、役に立たないかもしれない」

「……………」

「いじめはもちろんなくすべきだけど、活発な子が皆いじめっ子だと考えるのは短絡的な思考だと思う。たとえば、ショッピングセンターではしゃいで動き回っている子が、学校ではいじめられているっていうこともあるでしょう。あなたはいじめられて育ったから、歪んだ幻想を持つようになっちゃったのよ。自分の感情だけでものごとを判断するのではなく、もっと広い視野で考えることが必要だわ」

「……………」

「ちよつと言いすぎたかもしれない。ごめんなさい」

「…………いや、いいんだ。よくわからなくなってきた。次に来るまで、よく考えさせてくれ」
何となく気が楽になって、ショッピングセンターに行った。軽食エリアの横を通りすぎたときに、二人の男の子が飛び出してきてぶつかりそうになった。男の子たちは咄嗟に体を翻して、私をかわしていった。こいつらはサッカーに向いているな、と私は感じ、思わず苦笑した。

了

本作品の背景、登場人物は実在するものではありません。